

科目名	番組制作 2							年度	2024
英語科目名								学期	後期
学科・学年	放送芸術科 1 年次	必／選	必	時間数	30	単位数	2	種別※	講義
担当教員	高沢敦博		教員の実務経験		なし	実務経験の職種			
【科目の目的】									
映画・映像評論家とならずとも、製作者として正しい映像の見識を持ち、コンテンツを「主題」「脚本」「演出」「撮影技術」「演技」と視点を複数持ち鑑賞できるスキルを持つことを目的とする。									
【科目の概要】									
この授業では、個人ワークやグループワークを採り入れる。特にグループワークでは他人に気を遣い過ぎず、まず他人を傷つけることなく自分の意見を上手に伝えること、さらに相手の話をきちんと最後まで聞き、すぐに否定せず理解することを促す。そしてチームの意見としてまとめる努力をする。決して答えがあるわけではない映画を使い、習慣づけることを狙いとする。									
【到達目標】									
学生が特に＜実習＞において学ぶ技術は、実際どういった場面で、どのように生かせるのか、より視覚的なアプローチで示す授業である。学生は様々な映画、TV番組、映像を解説付きで鑑賞し、撮影技法、演出方法を一体的に学ぶことになる。映像から、それはどのようにどこから撮影されているかを想像し、理解することがひとつの目標となる。									
【授業の注意点】									
この授業では言葉を発することを促し、思っていること・意見を積極的に言えるようにし、多角的なモノの見方を学ぶので、学生同士の会話がある程度許容する。教員は、学生の勇気をもって発言した内容を否定しない。まず受け止め肯定し、いい点を褒める。次に反対意見、違う意見を求め、対話をリードする。									
評価基準＝ルーブリック									
ルーブリック 評価	レベル 5 優れている		レベル 3 ふつう		レベル 1 要努力				
到達目標 A 撮影・画角・照明	映像を観て、その撮影が どのように行われたかを 推測できる		映像を観て、その撮影が どのように行われたかを ある程度推測できる		映像を観てもそれがどの ように撮影されたか想像 もできない				
到達目標 B 編集と意図	映像を観て、その編集の 意図を汲み取ることがで きる		映像を観て、その編集の 意図をある程度汲み取る ことができる		映像を観ても、その編集 の意図がわからない				
到達目標 C 非言語の理解	説明的なセリフはなくとも、 映像で伝えようとして いることを正しく汲み 取ることができる		映像で伝えようとしてい ることの雰囲気くみ取 れる		セリフがないと理解でき ない				
【教科書】									
【参考資料】									
【成績の評価方法・評価基準】									
期末課題レポート									
※種別は講義、実習、演習のいずれかを記入。									

科目名		番組制作 2			年度	2024
英語表記					学期	後期
回数	授業テーマ	各授業の目的	授業内容	到達目標＝修得するスキル	評価	目標
1	歴史と向き合う		歴史と向き合う	伝えるということ		
				そしてメディアの仕事を考える		
5	撮影技術（４）様々なショット		撮影技術（４）	3分割法、画角		
			様々なショット	人物の動かし方		
3	ヨーロッパとキリスト教		ヨーロッパと	感性で受け止めることと、知識の使い方		
			キリスト教			
4	撮影技術（５）レンズと被写界深度		撮影技術（５）	レンズの種類と特徴と活かし方		
			レンズと	レンズによる被写界深度の変化		
			被写界深度			
5	リメイクとパロディと著作権		リメイクと	法的な背景と各国との違い		
			パロディと			
			著作権			
6	世界の映像を知る①インド		世界の映像を知る	インド映画の特徴と歴史を概観する		
			①インド			
7	世界の映像を知る②フランス□□		世界の映像を知る	主にヌーヴェルヴァーグの作家の		
			②フランス	登場の背景と芸術を概観する		
8	リメイク映画と国民性		リメイク映画と	様々なリメイク映画と独特な脚色から		
			各国の国民性	その国民性と社会常識を探る		
9	韓国映画の進化①		韓国映画の進化①	歴史的背景を探る		
10	韓国映画の進化②		韓国映画の進化②	映像教育と留学		
				他の要素の取り込み方		
11	韓国映画の進化③		韓国映画の進化③	プロデュースシステム		
				映像制作の環境		
12	韓国映画の進化④		韓国映画の進化④	社会問題の取り入れ方		
				女性スタッフの台頭と労働環境		
13	日本映画のいま①		日本映画のいま①	日本映画の最盛期		
				黒澤明、溝口健二、小津安二郎・・・		
14	日本映画のいま②		日本映画のいま②	テレビの発展と映画の衰退		
				日本独自のTV局映画の是非		
15	日本映画のいま③		日本映画のいま③	映画製作委員会の是非		
				つながらない系譜		

評価方法：1. 小テスト、2. パフォーマンス評価、3. その他

自己評価：S：とてもよくできた、A：よくできた、B：できた、C：少しできなかった、D：まったくできなかった

備考 等